



# 今月のミニ展示コーナー 解説シート

## 【展示のテーマ】 倭国大乱の時代の市原

### かんごうしゅうらく — 環濠集落と弥生時代の戦争と開発 —

市原市は、関東地方の中でも「環濠集落」が密集して分布する地域です。弥生時代は戦争の時代であり、集落の周りに濠を巡らす「環濠集落」は、戦乱に伴う防御機能を持つムラと考えられています。西日本では、この時代、武器の発達があり、「環濠集落」とともに戦乱時のムラと考えられている「高地性集落」も多数発見されています。

しかし、関東地方、市原市域では、弥生時代の武器がほとんど見当たりません。今回は、弥生時代終末期から古墳時代前期の武器を展示しました。これらは、古墳などから出土した副葬品であり、実際に使用された武器というよりも「威信具」であった可能性があります。

#### 【弥生時代中期】

列島東端の房総半島では、弥生時代中期後半になってようやく本格的な水田稲作農耕が定着し、これに伴い集落は劇的に増加しました。農耕定着期の集落の多くは、周囲に環濠を巡らした環濠集落でした。市原市域の環濠集落は、東京湾岸部から養老川・村田川流域の広大な平野部に直接面する台地縁辺部や、養老川・村田川の低位段丘面などに立地しており、これは、沖積地に対する積極的な水田開発

を意図したことによると考えられます。

菊間地区の市原条里制遺跡では、弥生時代中期後半の広範囲にわたる水田跡が発見されています。

国分寺台地区の根田代<sup>ねただい</sup>遺跡は、市内の環濠集落では最も内容が明らかとなった遺跡です。根田代遺跡は、養老川右岸



根田代遺跡環濠



の市原台地北西端の独立丘陵上に立地し、環濠規模は、北東—南西方向の長軸長外径で203.5m、北西—南東方向の短軸長で約133m、環濠区画総面積は約19,830 m<sup>2</sup>を測ります。環濠幅は調査時最大で約3m、本来は、幅5m、深さ4mに達していたと推定されます。

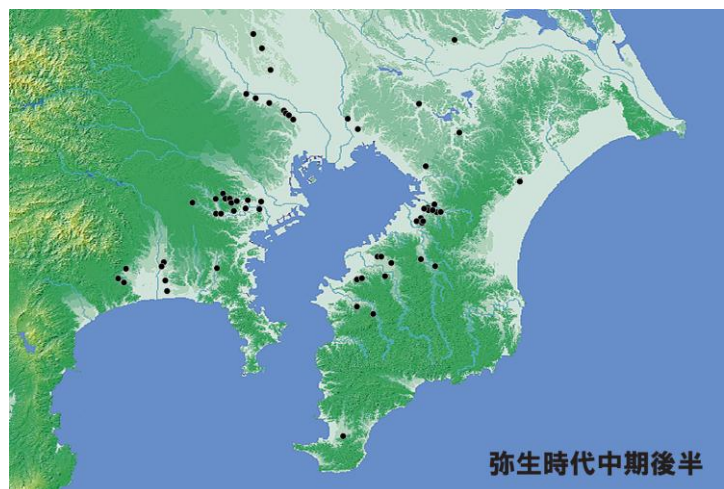
#### 【弥生時代後期】

市原市では、弥生時代後期の環濠集落は確認されていません。後期の環濠集落は、神奈川県の相模平野から埼玉県の大宮台地に至る地域に濃密に分布しています。この地域では、弥生時代後期に愛知県や静岡県域から、開拓を目的とした波状的な集団移住があり、移住に伴い環濠が開削されました。

#### 【弥生時代終末期】

邪馬台国の時代、弥生時代終末期になると、国分寺台遺跡群が地域の拠点集落となり、地域の統合を象徴するように東日本最古のこうと神門古墳群が造られました。この時期、統合の一方で、市原市周辺地域の人々は、新たな開拓のために北上し、古墳時代前期には東北南部に達しました。こうした地域にも、環濠集落が出現します。

このように、関東地方では、新たな開拓に伴う地域的な緊張を背景に環濠集落が形成されたと考えられます。



弥生時代は、統合へ向かう「倭国乱」の時代と言われています。しかし、南関東地方の環濠集落の形成は、こうした戦乱の余波なのか、あるいは個別の契機によるものかは、いまだはっきりしていません。

